



キャンパス・コラム

犬を見て思う

通勤途中の家から駅までの道のりで、よく犬を連れて散歩の人を見かける。時間帯により犬も違うし、それを連れてくる人間の方も違うのであるが、家から駅までのほんの10数分であっても、まず見かけない日はない。それも、10時を過ぎた帰宅の時でもである。私の通勤に合わせて犬を散歩させるわけではないから、相当の数の犬が近くにいることになる。

犬の数は全国で1000万頭と言われているが、ここ数年はほぼ横ばいか微減という統計である。最近特に犬の散歩を目にするように感じているが、それは私の犬に対して前より関心を持って見るようになったせいかもしれない。我が家にも一昨年の暮れから子犬がやってきて家族の一員として暮らしている。

犬がやってきたときには、犬は犬なりに家長が誰かを判断するというので、犬と家長の座をかけて争うわけにもいかず、かといって譲ることもできず緊張したものである。食事は人間が

済んでから、散歩では人間の後について歩かせるとか、子供の教育にも通じることがあるかもしれない。

一方、人間の教育のことを考えれば、おいぬ様ならぬ「お子様」で、なんでも子供優先という傾向がある。特に少子化という時代背景と、受験競争という特別な環境下で保護扱いが続く。

犬は非常に社会性のある動物だという。家族を大切に、自分が家族の中で分担する役割をきちんとこなすという。集団の一員であることを常に理解している。

テレビで、犬に顔を近づけると必ず口の周りをなめるという話を聞いた。これは、犬の先祖であるオオカミに起因するもので、生まれたばかりの子供とそれを育てるメス、オスは外で狩猟し、メスと子供に分まってお腹の中に蓄えて巣に帰る。子供はお父さんにお腹が空いたと伝える意味でお父さんの口の周りをなめる。父親はなめられることの刺激によって、胃のなかのものをはき出すというのである。

こんな父子関係は人間には見いだすのは難しいが、何か気になる話でもある。

広報委員 鎌倉稔成 (理工学部)